

2021年度 恵の実「ステップくん」

事業報告書

1 理念

ひとり一人の意欲を大切に、たくましく、かしこく、やさしく育つことを願いながら、発達の弱さをもつ子どもも含め、0歳から学童、大人まで共に育ち合う共同の子育てをめざします。

2 療育目標

- ① 恵の実っ子クラブと連携した交流活動の中で、子ども同士の関わり合い、育ち合いを大切にする。
- ② 仲間と共に様々な体験をしながら、賢さや生きる力を育てる。
- ③ どんなに障がいが高くとも、人間の育つ道筋は同じである。一人一人の発達に合わせて、ゆっくり丁寧に積み上げていく。
- ④ 職員と保護者が共に子どもの育ちを考えていけるよう、保護者が学ぶ機会を設け家族支援を行う。

3 職員体制

管理者	1名
児童発達支援管理責任者	1名
保育士	7名（うち、非常勤 2名）
事務員	1名

*管理者、保育士、事務員については他事業所との兼務あり

4 2021年度利用実績

・登録者人数 15名（うち、9月～ 1名） 毎日利用の児童 11名 その他 1名
他の事業所を併用している児童 5名

・定員 20名

・利用実績

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	平均
開所日	19	19	22	21	20	20	22	22	21	18	19	23	20.5
延べ利用者数	245	222	252	245	232	259	283	279	259	219	195	259	245.8
日平均	12.8	11.6	11.4	11.6	11.6	12.9	12.9	12.7	12.3	12.2	10.3	11.3	12.0

5 児童の処遇について

（健康管理）

- ・アセスメントを行い個々の健康状態、発達の様子、生活リズム、学校での様子、家庭環境、保護者の精神状態を把握し、その上で、支援の方向性の検討を行っている。
- ・夏のプール、水活動において、検温、体調把握に併せて、入水の可否を記入してもらい、可のみの子どもを対象に水の活動を行ってきた。
- ・緊急時に備えて、職員の普通救命講習を行った。

(コロナ感染症対策について)

- ・利用者7名、職員3名の陽性が確認された。職員1名は、ステップくんの利用者からの感染が疑われたが、その他の利用者や職員については、事業所内での感染ではないと考えている。また、家族が陽性となり、4名の利用者が濃厚接触者として自宅待機となった。自宅待機となった利用者には電話での支援を行った。利用者自身が陽性の方についても、自宅待機期間が長く家庭での生活が大変であることをうけ、テレビ電話での支援も行った。その他、感染の心配をされ利用を長期間にわたりお休みをする利用者の方もいた。その方は、ホップと違い、電話での支援を行うと利用料が発生してしまうため、電話で様子確認は行ったが、電話での支援は行えなかった。
- ・新型コロナウイルス感染症の拡大もあり、毎日の検温、体調把握に努めた。また、施設の衛生、手洗い消毒、換気を徹底し、子どもたちには手洗い消毒をしっかり定着していく様に支援した。
- ・送迎の必要な子においては、車内の換気はもちろんのこと、乗車に際して、手消毒をする様に努めた。

(療育内容)

- ・アセスメントを基に個々の課題に応じて個別支援計画を作成し、職員間での個々の課題を共有しながら療育を行ってきた。新規利用者については短期間での支援計画見直しを行い、その他の利用者については6カ月に一度、支援計画の見直しを行なっている。
- ・学校への送迎サービスを行うことで親さんの事業所への送りの負担を軽減できる。
- ・地域の学校に通っている子どもたちの中で、本人の困り感に対応してきた。他の機関や相談支援員の方、学校、事業所、家庭とで情報の共有をすることを行ってきた。その事から、個別支援の見直しを行い、本人の困り感への軽減に繋がっている。
- ・ステップくんは特別支援学校に通う子や地域の学校に通う子で年齢は小学校1年生から6年生までの幅がある。また、統合保育で恵の実っ子クラブの子との交流も大切に育ち合うことを保障している(縦割り班集団、同年齢集団、自由な集団)。それ故、ステップくんの子たちの中には遊ぶことや活動、生活することも友だちの様にはうまくできない事が多く、主人公として活動する経験が少なくなりがちである。そこで今年度は、そんな子たちが主人公になれる活動を考え、実践してきた。リズム講座では、ステップくんだけの会場で行い、親御さんにも参観していただいた。少人数だからこそ、じっくり、たっぷりと子どもたちのペースで行うことができた。親さんに“見せるんだ”と張り切って、取り組む姿が見られ、ステップくんだけのリズムの発表の場を設けた新しい取り組みが良かった。リズム講座当日の後半は会場を移動し、恵の実っ子の仲間と同じ会場で参加できるようにした。又、特別支援学校に通う子たちで学童の仲間や大人におやつを作って振る舞うという活動を取り入れ、「渡す」「運ぶ」「どうぞ」「ありがとう」と気持ちを通わすことで自分への手応えを感じる姿が見られた。色々な仲間集団があることで、そこでお手本をしたり、自分たちで考えて企画したことで仲間認められ、“自分ってスゴイ”を感じられる場面もよく見られるようになってきた。上半期の“パフェ屋さん”、下半期の“喫茶ステップくん”を開くにあたり、上半期で経験した力を、下半期では準備の段階で中学年の子が、低学年とグループをつくって、買い物に行く経験をした。「お兄さん」「お姉さん」という誇りをもつ経験ができた。
- ・毎日利用ではない子どもさんが来所する時は、「また次も〇〇と遊びたい」「今度はこんなことやってみよう」と思える様、その子の大好きな事を展開できる様、活動を考える様にしてきた。

・学童保育で過ごすひとときは、対指導員との関係だけでなく、子ども集団の中で受け止められる「生活の主人公」に生まれ変わっていきける時間の保障をしていくことを目指してきている。

・感覚統合遊びは、環境に恵まれた事もあり療育活動の中に規則的に組み入れる事が出来た。

・創造的活動は、外部講師を招き、計画的に活動してきた。個々に合わせた対応は、指導員と一緒に活動に参加し、製作物の内容も変化させる等の工夫が必要であった。卒所生へのプレゼントの写真たての台紙や思い出の写真展示の土台を色染めしたり、その子なりの表現で花のアートに仕上げ飾ることができ、多くの人の目にも触れることができた。恵の実っ子の卒所生にも喜ばれた嬉しい出来事となった。

・個別活動の支援は、より細やかな職員の連携が必要になってきている。また、指導員の適性を考えた配置も必要になってきている。特に冬は、足湯やマッサージを取り入れ、気持ちの表出がゆっくりな子どもさんと心を交わせるひと時を大切に「ほっこりタイム」を設けた。仲間や大人とじっくりと向き合い、目や声や表情から気持ちが伝わってくる場面が多く見られるようになってきた。

・茶話会は、定期的（1回／月）を目安に行ってきた。普段は中々話すことが出来ないことを共有できる機会となった。子育ての悩み、将来の不安等を話しことで学びの場も必要になってきていると感じている。親さん同士の親睦にもなっている。

・活動内容によっては、親御さんの協力をお願いしている。得意分野での力を発揮してもらい、活動へのアイデアもいただき、参考になった。自分の子ども以外の子と接することで子育ての学びに繋がってきた。

(安全管理)

・火災、竜巻、地震を想定した避難訓練を保育園やホップくんが行うのに合わせて実施。実働に合わせて、他事業所と協力し合って、災害対策ができるよう、法人としての消防組織を設置している。

・ステップくん単独では、3月に地震による避難訓練を行なった。

6 職員の処遇について

(会議)

・職員会議、事業所内の会議を実施してきた。情報の共有の場でもあるので今後も定期的に行い、支援の方向性を多面的に検討するために必要性を感じている。

・虐待防止対策として、事業所内研修を行ってきた。(外部研修での資料を回覧する)

(労務管理)

・事務作業の時間をとり、効率化を図ってきた。

・日常の労務や療育に対する困り感を抱え込んでしまわない様、個々で聞き取ることも大事にしつつ、職員間の風通しが良くなる様、努めている。

(研修)

・水・山の安全学習

・「障害児の育つ放課後」一白石正久 学習会

・誤嚥事故対応の実践講習会

・全国保育実践交流連絡会（春・秋）

・東海地区職員学習会

・わかりやすい自閉症基礎講座

- ・障害福祉従事者初任者研修
- ・「愛着障害をめぐって～愛着障害って何だろう～」
- ・「学校とじょうずな付き合い方～多様な支援の選択肢～」
- ・豊川特別支援学校見学会

7 施設管理

- ・ゲミノハウスの老朽化に伴い、撤去した。
- ・トランポリン安全マットについては、応急的に補修を行った。今後に向けて、新しく取り替えを業者をお願いしてある。
- ・環境整備の時間を設け、草とり、園庭整備等を行ってきた。
- ・夏の陽ざし対策のため、秋には木を植える予定であったが、3月に園庭に大きい木2本、周辺に実のなる木などを植え、木陰ができる様、又、木の実採りができる様、環境を整えた。

8 地域社会との連携

- ・去年に引き続き、放課後デイサービス共有会議への参加をしていく予定であったが、新型コロナウイルスの影響で実施されていない。今後、開催の見通しが立てば、参加していく予定である。
- ・白川を愛する会への参加をしている。春のコスモス植えや周辺の草取り、秋のコスモスの片付け作業に参加し、地域の方との触れ合いの場となった。又、恵の実便りにこの活動の様子を載せ、会の代表の方へ届けると、会報でも紹介して下さるほど、認知されてきている。

9 ヒヤリハット 12件 事故報告書件数 0件

- ① 駐車中の車から一人で降車し、駐車場へ出て行ってしまった。
- ② 高い遊具から落ちそうになった。
- ③ 火の活動中、自分の靴を火の中へ投げ入れる。
- ④ 窓の棧に登って窓を開け、身を乗り出しかけていた。
- ⑤ 包丁の安全管理不足で、児童が持って落とした。
- ⑥ ゼリーを喉につまらせた。
- ⑦ 正門横にある郵便受けに登って、門から出る素振りを見せて大人の反応を楽しんでいた。
- ⑧ 子どもが正門から出て行く。
- ⑨ 散歩中、子どもを見失う。
- ⑩ 室内ブランコから転倒。
- ⑪ テラスから転倒。
- ⑫ 園舎の門で、外出から帰った園児たちが入室するタイミングに、付近でステップくんの子が遊んでいた。その時、職員が目を見失っていた事で、勝手に出てしまいかねない状況であった。

<対策>

- ・職員周知、職員会議での対策を共有。
- ・体制のあり方や職員同士の声の掛け合いや連携の仕方の徹底。
- ・子ども自身が危険に対する認識や身体の使い方等を身に付けていけるような療育の展開。

10 苦情報告

特になし

11 状況と分析（今後へ向けて）

- ・職員会議、事業所内の会議や毎日の子どもの受け入れ前ミーティングで、職員が問題を抱え込まずに職員間で共有し、考え合うことで迅速に対応でき、統合保育における職員と子どもたちの集団づくりに繋がっている。
- ・今年度大切にしたい、仲間とつながり合う喜びを感じられる活動、又、ひとりひとりが輝く場所を作っていこうという中で、いくつかの活動に取り組んだ。学童の仲間の中で、あるいは、ステップくんの仲間の中で、子どもたちの見せる姿に変化や成長を感じた。反面、同じ学年の仲間との密な関わりが、あまり出来なかった。令和4年度は、学年会に参加したり、活動の企画に恵の実っ子の子たちも一緒になって、ステップくんの子のことも含め、考えていけるようにしていく。又、親同士子どもの事を共有し合う場を大切にしていく。（クラス会など）
- ・恵の実っ子クラブの子との交流活動の良さも大事にしなが、個々への配慮、また個々の持っている特性に対する配慮をしつつも、本人の持ち味として仲間からも認められる場面を作っていける活動を後半も考えて取り組めた。個別対応や小集団活動の中で一人ひとり、輝く場を心がけたことで、「明日も続きをやる」と楽しみに来所できるようになってきていると思われる。
- ・今年度より定員を20名に増やしたことで、月ごとの利用者の割合が去年に比べて減った。しかし、登録者数は去年と変わらないが、延べ利用者数は他事業所を併用している子もいる中で増えているということから、一人ひとりが仲間の中で輝ける場を作ってきたことで、放課後、仲間と過ごすということが子どもの生活に必要であると同時に、楽しい場になってきているからではないかと思われる。又、コロナ感染者があったり、感染予防等で休所になったり、休む子どもさんもあって、特に2月は利用者がかなり減った。
- ・令和4年度の利用に向けて見学者が増え、新年度は登録者数が増えていく見通しができた。
- ・活動企画する上で、保護者の協力、応援があったからこそ、成し得た活動もあり、活動ごとに振り返りをし、親さんの学びの場になった事も良かった。
- ・ログハウスが建設されたことで少人数でのゆったりとした活動の保障につながった。状況によって、住み分けができ、子どもの安心へと繋がった。
- ・保護者支援として、保護者との日常的な対話を大切にしているが、まずは、保護者の話を“聴く”ことを心がけていく必要がある。そして、子育ての大変さを共有していく。
- ・利用者の年齢が高学年になり、成長に伴い、同性介助の必要性を感じた。対策として着替えのための個室を使用したり、下着をつける習慣にする等、親御さんとも共有できた。
- ・茶話会は引き続き定期的開催し、子育ての悩みを出せる場、また、保護者同士の交流の場とするとともに、将来への展望が持てる場としていく。
- ・感染症の拡大状況を確認しながら資質向上のため、必要な外部研修に参加を斡旋していく。研修をしてきた事を他の職員にも学びの場を共有できるようにした。
- ・非常災害対策として地震、火災等の避難訓練は、保育園の計画に参加する形となった。ステップくん単独は、1回やることができた。新年度は、園の計画に参加もするが、さらにステップくん単独の計

画を立てる様、担当を決めた。

- 親御さんへの事業所アンケートの結果が、前年度に比べ、概ね良い評価がもられた。記述式アンケートでの意見について、茶話会などで回答し、共有することができた。苦情も0件であったが、日頃から、もっと意見や苦情が出しやすくなる様、意見箱を設置していく。
- 今年度から保護者が企画を進めている“紡ぐ輪”を応援し、保育活動と連携させて活動が始まり、気運も高まってきている。今後も様々な企画を応援し、子どもの可能性を広げ、保護者の希望へつなげていく。とりわけ、11月には“紡ぐ輪”主催のマルシェが開催され、園内で多くの親さんや職員たちが出店をし、人と人とのつながり合う事の大切にしていくというテーマが実現された。